

日本学術会議 幹事会附置委員会  
フューチャー・アースの推進に関する委員会（第23期第3回）  
議事要旨

1. 日 時：平成27年5月8日（金）13:00～15:00

2. 場 所：日本学術会議 2階 大会議室

3. 出席状況

出席者：安成委員長、杉原副委員長、江守幹事（スカイプ）、蟹江幹事、遠藤委員、西條委員（スカイプ）、向井委員、中村委員、氷見山委員、沖委員、春日委員、小池委員（スカイプ）、三枝委員（スカイプ）、中静委員、中島委員、春山委員、安岡委員、山形委員、山本委員（スカイプ）、大手委員（スカイプ）、谷口委員、福土委員、村山委員（23名）

欠席者：巖佐委員、武内委員、大西委員、花木委員、植田委員、小林委員、毛利委員、植松委員（8名）

オブザーバー：トヨタ自動車（株）長谷川雅世環境部環境渉外室担当部長、地球研 石井准教授、大西氏、JST-RISTEX 津田博司企画運営室調査役、廣田氏、文部科学省研究開発局 高木技術参与

事務局：千葉次長、盛田参事官、佐藤参事官、松宮補佐、大西専門職、熊谷専門職付、辻上席学術調査員

4. 配布資料：

資料1：フューチャー・アースの推進に関する委員会（第23期第2回）議事要旨（案）

資料2：FE 国際委員会（EC/SC 合同委員会関係資料）

資料3：SRA62 勉強会#1（2015/05/01 GRIPS）メモ（4班分）

参考： 委員名簿

5. 議 事：

（1）前回議事要旨（案）の確認

資料1に基づいて、前回議事要旨（案）が確認され、了承された。

（2）Future Earth の国内外での進捗状況について

資料2に基づいて、安成委員長より、Future Earth（以下、FE）関連の国内外会議等の報告が行われた。

資料2の Attachment 1に記載されている、DIVERSITAS、IGBP、IHDP等のプログラムのもとにある（あった）21のコアプロジェクトのFEへの移行状況について紹介があった。既に、FEとMOUを締結したコアプロジェクトは3つ、締結作業が始まったものが4つ、レビューに基づいて調整中のものが4つ、レビュー中のものが4つ、FEへのコミットを決めていないものが6つであった。

（3）分科会の進捗状況について

コアプロジェクトに対応する日本学術会議内の分科会・小委員会のあり方について議論が行われた。

コアプロジェクトに対応する小委員会の設置場所については、FEを広めるという観点等に鑑み、当面は現在のように分野別委員会に設置し、またIWD分科会等においては今後を見据えた望ましい体制を検討する必要があることが指摘された。なお、こうした取り組みにおいては、FE本体のあり方をよく見極めたうえで、仕組みを整えていく必要が指摘された。

今後は、IWD分科会及びIHDP分科会において、コアプロジェクトの代表を交えて、FEの国際動向を鑑みたくてコミュニティとしてどうすべきかについて議論し、その内容を踏まえて再度、FE推進委員会で検討することとした。また、FE推進委員会と関連分科会・小委員会の情報交換はより密にする必要性も確認された。

主な意見は次の通り。

#### 【コアプロジェクトの設置場所について】

- ・コアプロジェクトに対応する小委員会の設置場所について、幹事会附置である本委員会か、分野別委員会か検討する必要がある。本委員会に設置することについては、学術会議として設置できるかどうかという問題のほかに、学術会議全体の取り組みに広げにくい・学術会議の中で孤立しやすいという問題がある。複数の分野別のコミュニティとつながりを持ちFEを広範な活動に広げる重要性を鑑みると、分野別委員会が妥当かもしれない。また、IHDPが昨年終了したが、学術会議においては少し名前を変えてIHDPの名を残した分科会を暫定的に設置している。分野別委員会に設置した場合に、もともとのプログラムの枠組み（例えばIHDPの枠組みなど）を残すのかと言った問題がある。
- ・現状の学術会議内のIWD（IGBP・WCRP・DIVERSITAS）分科会と関連する小委員会という枠組みは、良い面もあるが国際的な動きへの機動性という面で課題がある。また21のコアプロジェクトのうち、20についてはそれに対応する学術会議に対応する分科会・小委員会が存在する。そのうち、国内ではほぼ活動を停止しているものもあるが、それらの再編成の必要があると考える。
- ・小委員会レベル（プロジェクト対応の小委員会）で活動を停止しているものは仕方がないので、活発なものが引き続ききちんと活動できることが大切である。
- ・本委員会のような幹事会附置委員会は、期をまたいで設置できない。一方で分野別委員会は、期を超えて存在し「常置」とすることができる。
- ・コアプロジェクト本体がFEのアンブレラに移行するに伴って、コアプロジェクトの性質そのものが変化している。それはESGにおいて実際に生じている。FEのイニシアティブとのかかわりや他のコアプロジェクトとの連携を考えると、小委員会の設置場所も本委員会のしたにあった方がやりやすいように思うが、不確実性についても考慮する必要がある。そうすると、当面は現状のやり方が一つの方法である。重要なのは、FEの情報がきちんと入ってくることであり、そのために、本委員会や分科会に、小委員会がつながっているということが大切である。
- ・分科会の代表は、本委員会に参加しているので、FEの動向について伝わるプロセスはある。

#### 【分科会によるコアプロジェクトのグループ分けについて】

- ・IWD分科会は、少し大きすぎるので4つ程度に分けた方が良いのではないかと。旧IGBPの受け皿が必要なのではないかと。
- ・FEを見据えた時に、国内においても各プログラムと一緒にやっていく必要があった。それと同時に分科会の数が多すぎるという問題が一方であったので、統合した分科会をつくったという経緯がある。また、IGBPはまもなくなくなるのでこのままでも大丈夫ではないかと。
- ・IWD分科会を合同でやっているメリットはあるが、束ねる苦勞もある。
- ・国際分担金の負担のあり方を考えると、WCRPについては、別の扱いとするのが望ましいのではないかと。もともとあった委員会の上下関係の逆転問題に加えて、FEの移行に伴い整理の必要がある。大分統合されたが、今一度多面的に整理した方が良いのではないかと。
- ・この委員会ですら、FEの新しい構造や理念などを考えたうえで、過去の遺産に引っ張られないように、国内対応を考える必要があるのではないかと。
- ・FEに移行したコアプロジェクトは、特段、IGBPやIHDPなどといった枠組みでグループ分けされるわけではない。個別のコアプロジェクトの管理についても、各国の国際事務局で分担して行うが、その際に旧IGBPなどの昔のプログラムのくくりは考慮されない。こうした中で、学術会議内の分科会・小委員会においても、従来のグループ分けにこだわる必要はなく、仮にグループ分けする場合には「以前同じプログラムだったから」以上の理由が必要である。
- ・当面は現状で良いだろうが、IWD分科会でも望ましい体制について考えてほしい。
- ・既存のプロジェクトがどのように移行していくか見極め、考えていく必要がある。それまでは継続性の観点から現在の枠組みを維持する必要がある。またWCRPについては切り分けも視野に入れ進めていければ良い。

#### 【FEというアンブレラについて】

- ・FEの推進と言った時に、そのアンブレラのもとで既存のプログラム（プロジェクト）を推進し

FE にフィットした新しいものを目指すのか、そもそも新しいプログラム（プロジェクト）を立ち上げて推進させようとするのか。という戦略がある。これについては、他の国の戦略と、日本の戦略では違うのではないかと。シャープな研究提案ということであれば、既存のプログラムからの方が行いやすいと思われるが、日本では「新しいプログラム（プロジェクト）を立ち上げよう」として困難に直面しているということではないか。国際的にどのような動きとなるのか、そのことを見据えたうえで、国内のことを考えるべきである。

- FE は、アンブレラであって、個々のプロジェクトではないという理解でいる。
- FE は、新しい科学のスタイルを決め実施していく母体なので、その実施の方向性等を確認しておく必要があるのではないかと。これまでの枠組みをガラガラポンしたが、例えば、個別のプロジェクトが過去のプログラムを超えて共同して推進されることが期待されている。それを、どのように進めていくのかといった確認が必要なのではないかと。
- IGBP と IHDP のジョイントは推奨されていると考えられ、一定の方向性を持ってガラガラポンされたという理解である。また例えば教育の推進については、新しい取り組みとして日本でイニシアティブが取れるところまで来ている。このように新しい取り組みもある。
- IWD 分科会及び IHDP 分科会で、コアプロジェクトの代表を交えて、国際動向を鑑みたうえでコミュニティとしてどうすべきかについて議論してほしい。その内容を踏まえて再度検討したい。

#### 【その他】

- コアプロジェクトはそれぞれの国際事務局が管理する。一か国おおむね4つ程度のコアプロジェクトを担当するが、日本として担当した方が良いコアプロジェクトがあれば、日本の国際事務局に申し出てほしい。

(4) 総合科学技術イノベーション会議（CSTI）での Future Earth 紹介（5月14日）について  
安成委員長と春日委員より、5月14日に予定している総合科学技術イノベーション会議（CSTI）での Future Earth 紹介の事前プレゼンテーションが行われた。

事前プレゼンテーションについては、「日本がどう貢献できるのか、社会実装がどのように実現するのか、具体的に示すこと」「コーデザインについて見えるように示すこと」「環境と経済のつながりの説明を丁寧にする」「サイエンスにソーシャルサイエンスも含めること」と等のコメント・要望があった。

(5) SRA2014 勉強会（5月1日）の報告

資料3に基づいて、谷口委員より、5月1日に GRIPS 行われた SRA2014 の勉強会の報告が行われた。本委員会17名、日本コンソーシアム12名、官庁関係者7名の計36人の参加があった。重要性（日本、アジア、グローバル）、抜けているもの等について活発な議論が行われた。参加者からは次回開催希望があった。次回開催する場合は、より時間を確保し、企業関係者の参加も視野に入れて考えたい。

(6) Future Earth 国際委員会およびワークショップ（11月）について

福士委員より、FE 国際委員会開催にあわせて行われるワークショップについて、日程が11月15日（日）となる見込みであること、また開催にあたっては FE 国際委員会の実行委員会と連携して進めていくことなどの報告が行われた。

(7) その他

#### ■ 次回の開催等について

6月後半から7月の初めごろ開催に向けて調整することとした。

以上